韓国から日本に渡り、在日の祖先を祀る

――在日コリアン社会で生きる韓国人女性たちの声――

荻 翔一
OGI Shoichi

近年、韓国ではフェミニズム運動の盛り上がりとともに、女性が抱える生きづらさや苦痛、社会からの抑圧を描いた文学作品が注目されている。なかでも二〇一六年に刊行された小説『82年生まれ、キム・ジョン』（チョ・ナムジュ著、邦訳は斎藤真理子訳、筑摩書房、二〇一八年、ちくま文庫、二〇二三年）は、多くの人々の共感や支持を得てベストセラーになった。

同作では、女性であることによって、人生の様々な場面で生きづらさを経験してきた主人公キム・ジョンの半生が描かれる。その冒頭、秋夕（チュソク）（日本でいう旧盆）に彼女が夫の実家に帰省する場面で「事件」が起きる。キム・ジョンは着いて間もなく台所に立ち、翌日も朝から義母とともに料理を作り続けていた。すると突然、彼女に実母が「憑依」する。そして「お義母さん。うちのジョンはねえ、実は、帰省のたびに体をこわすんですよぉー」などと訴え出したのだ。夫は慌ててジョンと子供を連れ出し、実家を後にする――。

朝鮮半島では旧正月や秋夕といった時期を名節（ミョンジョル）という。名節には家族や親戚が集まり、儒教式で祖先を祀る「チェサ」の習慣がある。名節は妻にとって、ただでさえ夫の家族や次々に集まる親戚との付き合いで神経を使う時期である。それに加えて、チェサ用の供物を調理し、夫の家族・親族に料理を出すことが女性の仕事とされ、嫁は台所を離れて休むことすらままならない。韓国では、名節にともなうストレスで女性（特に嫁）が体調不良になることを指す「名節症候群」という語があるほどで、その在り方が問題視されている。キム・ジョンに「憑依」した実母の訴えには、そのような背景がある。

私が最近話を伺った二人の韓国人女性も結婚後、チェサに対するストレスを抱えてきたという。二人は一九八〇年代前半生まれ、キム・ジョンと同世代だ。異なるのはその後、二十代で日本に渡り、在日コリアン三世と出会い結婚したという点である。在日コリアン社会でもチェサを営む家庭が多く、彼女たちは日本でもチェサに関わるようになった。しかしその在り方は韓国の場合とやや異なる。

チェサは在日コリアンにとって、いわば祖国の「伝統」にのっとった行事であり、民族文化に触れる格好の機会だ。そのため、自らのルーツやアイデンティティを再確認するきっかけとなったり、同胞のつながりを維持・強化する場となったりもする。日本社会で差別的な待遇を受けてきた在日コリアンには、「在日」であることを否定的に捉える者も少なくない。そうした中で、チェサが一定のポジティヴな役割を果たしてきたことは想像に難くないだろう。だからこそ、在日コリアンの中でも「伝統」や「民族」を大事にする家庭ではチェサに対する特別な思い入れがある。彼女たちは、そのような在日コリアンが営むチェサと出会ったのだ。

趙さん（仮名）は、今でこそ回数は減ったが、

結婚当初は年に四回ほどチェサを営んでいた。まずは上の写真を見てほしい。

部屋の一辺を占める祭壇いっぱいに供物が並べられている。それらの食材の準備や調理にどれほどの手間暇がかかるか想像できるだろう。しかも供物を乗せる食器は専用のもので、きれいに保たなければすぐに錆びてしまう。そのため水拭きにも神経をとがらせる。

また、チェサは、出身地や家庭によって供物の種類や調理法、祭壇への配置方法などが異なるのも特徴の一つだ。趙さんは実家でチェサを手伝っていたが、夫の家族の流儀との違いに慣れるのにずいぶん苦労したという。それだけチェサの準備に心血を注いでも、祖先を祀る儀礼に参加できるのは基本的に男性のみというのが「伝統」だ。趙さんも当初は参加が認められなかったが、「私が料理したのになんで参加できないのか」と抗議したことでなんとか認められるようになったそうだ。

鄭さん（仮名）は、在日コリアン三世の夫を「日本人」のような「普通の家庭」の人だと思っていたそうだ。それがいざ結婚してみると、夫の家族は親戚一同が集まり、四十～五十人規模の盛大なチェサを年に三～四回営んでいる家庭だと知った。鄭さんの実家では母がチェサの準備を取り仕切っており、当時はノータッチであったというから、その落差に驚愕したことだろう。嫁いだ先では、一か月前から何をどの店で買うのか細かく計画を立てて準備する必要があったという。男性は粛々と儀礼を行えばそれでお役御免だが、女性たちにとってチェサはもっと長いスパンで考えなくてはならず、その負担は計り知れない。また食材の調理法についても参列者の「こだわり」があるため、肉や魚を囲炉裏で焼くこともあったそうだ。その翌日は、腰痛で起き上がれなかったと語る。

彼女たちが問題にしているのは、「女性（特に嫁）が台所に立つのは当たり前だ」という保守的なジェンダー規範であり、韓国社会にもそれは根強く残っている。ただ、チェサのあり方が問題だとしばしばニュース等で報道され、中にはその時期にあえて海外旅行に行くような家庭も出てきた韓国社会の変化を見聞きしている分、より不満が募るようだ。

彼女たちからすれば、そのような現代の韓国社会と比べ、夫の家庭で営まれてきた盛大で「伝統」的なチェサの様子は「昔の韓国人」が行ってきたものに見えるという。在日コリアン社会のチェサも簡素化・合理化しているというが、おそらくその変化が韓国よりも緩慢に見えるのだろう。また、チェサを営まない韓国の友人から「日本に行ってまで、なぜチェサをするのか」と言われたこともあり、「韓国の友人と比べて」という想いが頭をよぎるのかもしれない。

韓国から日本に渡ってきた彼女たちのチェサにまつわる経験は、キム・ジョンのそれと重なりつつも独特の様相を呈しているように思われる。彼女たちの抱える悩みは、家父長制の問題が背景にある点で、単なる夫婦間のすれ違いや葛藤にとどまらない構造的なものである。そこに、韓国と在日コリアン社会の文化的、社会的な背景の違いが加わって、不満が増幅しているのかもしれない。

チェサはあくまで一例だ。話を伺っている最中、妻として、母として、そして在日外国人として、社会から幾層もの「期待」と「抑圧」を受けていることが言葉の端々から推察できた。今後はより視野を広げて彼女たちの声を丁寧に聴いていきたい。

（おぎ　しょういち・日本学術振興会特別研究員（PD））

近年の論文に、「『在日コリアンと宗教』研究の成果と課題」（井上貴也・荻翔一・高橋圭・子島進『アジア諸国の持続可能性（1）』、二〇二三）、「高齢化問題に取り組む韓国系キリスト教会――大阪市・在日コリアン集住地域を事例に――」（高橋典史・白波瀬達也・星野壮編『現代日本の宗教と多文化共生――移民と地域社会の関係性を探る』、二〇一八）など。